

## 論文要旨

対話的思想における人間形成論的研究：H. アーレントから F. ローゼンツヴァイクへ

田中直美

本論文の目的は、フランツ・ローゼンツヴァイク (Franz Rosenzweig, 1886-1929) の対話的思想を明らかにすることによって、現代の教育哲学の領域に向けて新たな視点を提示することである。

20 世紀の後半の思想は、レヴィナスやデリダに見られるように他者性への気づきとその尊重のあり方を考えてきた。これまでも他者といかに関わるのかの問題を巡って議論が展開されてきたが、この問題に関してはすでに 1930 年代に実存哲学の脈絡でヤスパースが議論していた。彼が「愛しながらの闘争」と呼んでいるこの対話においては、互いに相手が何者であるのかを問いただしあうことによって、両者は互いに自己を示すことができる。

しかしヤスパースの「対話」は、親密な他者と私の二者間で行われるものであり、こうした他者との対話に関する議論を、特定の他者との関わりから他者一般との関わりの方に拡張したのがハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) であった。

アーレントの対話的思想における「応答」という側面は、とりわけ晩年のアイヒマン裁判の傍聴を経て、その能動的契機が重視される。これには彼女のユダヤ的出自が関係していると思われるが、ユダヤ的な「対話」思想としてみた場合、彼女の思想において背景化されているものがある。このことが明らかになるのは、ローゼンツヴァイクと比較する場合である。

本論文ではこの点を明らかにするとともに、ローゼンツヴァイクの対話的思想が、いかにアーレントによって社会構築の原理論まで拡張された対話的思想に新たな視座をもたらすことができるのかを提示することを試みた。アーレントが対話的思想を形成するさいの基盤には一貫してヤスパースの思想があったことに鑑みれば、彼女の思想において前景化されない点を明らかにすることは、間接的に教育哲学研究における対話的思想研究に新たな視座も提供できるはずである。

そのため、**まず**、アーレントがいかに公的領域における言語活動によって二者間における対話を第三者へと広げる対話へと拡張したのかを示すために、**第一章**では、アーレントが対話に関する理論を構築する上で、ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) の実存哲学からどのような影響を受け、独自の公共思想を形成していったのかを、「愛」の概念を手がかりに明らかにした。アーレントの言語活動は、自己と他者を結びつけ、同時に分け隔てている「介在するもの」が両者のあいだに現れることで、私は自己を他者の「誰性」と差異化し、特異化するものであった。このような言語活動、そしてその言語活動そのものに含まれている自己形成のあり方を解明することによって、アーレントの対話的思想においては、他者の他者性が尊重されることが明らかになった。

次に、**第一章**で明らかになった彼女の対話思想を、改めてユダヤ的な対話思想から考え直し、彼女の思想におけるユダヤ的側面を確認するとともに、ユダヤ的な対話思想という観点からみると彼女の思想において前景化しない点を浮き上がらせるために、**第二章**では、アイヒマン裁判 (1961 年) 以前と以後のアーレントの悪についての議論を踏まえ、レヴィナスの応答責任という対話思想から彼女の対話思想を捉え直した。

そして、ユダヤ的な対話思想の骨格をローゼンツヴァイクの思想から明示することのために、**まず第**

三章では、ローゼンツヴァイクが、学生時代に取り組んだヘーゲル哲学をモノローグの思考だと批判し、それに抗するかたちで独自にダイアローグの思考を展開し始めた経緯を明らかにした。

第四章では、まず命令法という一つの文法によって対話的思考を説明し、彼が啓示を、神が人間に単に呼びかけることにとどまらず、隣人愛の命令として捉えていることを明示した。次に、この隣人愛がどのように現れてくるのかという具体層を、固有名を付けることに着目して解明した。すなわち、ローゼンツヴァイクは、個々人が人名や事物の名前を新たに名づけることにおいて、そしてその名づけを、神の言葉のように創造と言葉が一致していないにもかかわらず試みることに、人類は言い当てられない神の言葉のうちに居合わせていると想定していた。そして、その言語同士がどんな支配的な共通性を前提することなく異質なままで協調するようなあり方に、他者性の尊重のあり方を看取っていた。それゆえこの他者性の尊重を、ローゼンツヴァイクが教育の問題として引き受け、さらに教育の問題として引き受けられた他者性の尊重という問題が、ユダヤ性を伝承する手段としての翻訳の課題として展開されていったことを明らかにした。

ここまで述べてきたローゼンツヴァイクの対話的思考には、彼の翻訳論がその基盤にあることを明らかにするために、第五章では、ローゼンツヴァイクの翻訳論がどのように展開されているのかを確認した。ローゼンツヴァイクが翻訳で目指していたものは、(1)神の言葉の精神が注がれたヘブライ語の精神を伝承していくこと、そして(2)神の言葉そのものを、それが不可能だとしても言い当てることであった。

神の言葉そのものを我々が言い当てることのできないにもかかわらず、それを目指して翻訳しなければならないという構造は、神の呼びかけから始まり、それに応答する対話的思考の文法構造と一致しており、神の言葉の痕跡を、翻訳によって、神の言葉そのものが浮かび上がるように試みていたということから、彼の対話的思考が翻訳論に基づいていることを示した。

また、人間が翻訳によって神の言語を指示することを試みながらも、その翻訳が確かにそれを指示しているかどうかは、人間の外部に存在する神が判断するという終末論が想定されていることで、人々の中に優劣をつけずに、他者性が尊重されることを確認した。

さいごに、このようなローゼンツヴァイクの対話的思想からアーレントの思想を捉え直すと、ローゼンツヴァイクが徹底して「聞くこと」という受動性を強調していった点こそが、アーレントの対話的思想においては前景化してこない点であることがわかった。ローゼンツヴァイクの対話的思想は、自己と他者が共に生きていくうえで必要なものを今一度問い直す契機を与えてくれるだろう。

(2486 字)